

労働時間が価値量を規定するか？

——マルクス価値論の批判 (2) ——

金子 甫

目 次

- 〔1〕 諸生産物の価値同等性は諸労働の相互的独立を前提する
- 〔2〕 諸生産物が同じ価値の諸商品として相対する条件と労働時間
- 〔3〕 労働価値説と比較生産費説
- 〔4〕 「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」
- 〔5〕 「単純な平均労働」と「複雑労働」

【1】 諸生産物の価値同等性は諸労働の相互的独立を前提する

マルクスは、交換者として相対する諸生産者の労働の「有用な諸形態の違い」(『資本論』Bd. I, S. 49. 岩⁽¹⁾ 91頁)¹⁾を捨象することによって得られる「同じ人間的労働，抽象的人間的労働」(同上, S. 42. ⁽¹⁾ 79頁)が，彼らの生産物の価値を形成する実体であるという見解にもとづいて，各生産物の価値の大きさは，その生産に必要な「労働時間」によって規定されると考えた。彼は言う。

「したがって，ある使用価値または財が価値をもつのは，抽象的人間的労働がそこに対象化または物質化されているからである。そこで，その価値の大きさはどのよ

1) Karl Marx, *Das Kapital*, Dietz Verlag Berlin, 1953, Bd. I, S. 49. 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫版，第1分冊，91頁。以下でも，上のように略記する。訳文責は引用者にある。なお，原文のイタリック体はとくに表示しない。また，本稿における引用文中の上つき力点は，とくに断わらないかぎり引用者によるものである。

うに測られるか？それに含まれている『価値を形成する実体』の、すなわち労働の量によって。労働自体の量は、その時間継続で測られる。そして、労働時間は、さらに、時間、日などのような一定の時間部分にその尺度標準をもっている。」（同上, S. 43. ㉔80頁）

このように、マルクスは、「ある使用価値」の「価値の大きさ」は「それに含まれている『価値を形成する実体』の、すなわち労働の量」によって測られ、「労働自体の量は、その時間継続で測られる」と言っている。したがって、「労働時間」が「商品の内在的価値尺度」（同上, S. 99. ㉔183頁）であり、「ある使用価値の価値量を規定するものは、社会的に必要な労働の量、またはその製造に社会的に必要な労働時間だけである」（同上, S. 44. ㉔81頁）ということになる。

「質的に異なる有用的労働」の共通な性質である「同じ人間的労働」が、「質的に異なる有用的労働の生産物」の共通な性質である「価値」に表わされるというマルクスの見解は、彼が、「質的に異なる有用的労働」を、交換関係において相対する異なる人たちの労働と同じものとしてとりあつかっていること、したがって、事実上、交換者として相対する諸生産者の労働の質的な違いを、彼らの労働の「有用な諸形態の違い」に帰着するものとしてとりあつかっていることを意味する。このような見地にたてば、交換者として相対する諸生産者の労働の質的な違いは、異なる有用物を得るための同じ個人の労働の諸形態の違いと同じ性質のものになる。実際に、マルクスは、交換において相対する「異なる個人」の労働を、「同じ個人の労働の諸変異」（同上, S. 48. ㉔89頁）と同じものとして述べることによって、これらの異なる個人の労働が「人間的労働」の「異なる形態」にすぎないという見解を説明しており、さらに、孤立人ロビンソンを例にあげて、「同一のロビンソンの異なる活動諸形態」は「人間的労働の異なる

るやり方」(同上, S. 82. (1) 149頁)であるとも言っている。そして、この「人間的労働」こそ、「価値を形成する実体」であった。だから、「ロビンソンと彼の自製の富を構成している諸物とのあいだのすべての関係」のうちに「価値のすべての本質的規定が含まれている」(同上, S. 82. (1) 150頁)ということになる。このように、マルクスは、人と人との交換関係を捨象して、人と物との関係のうちに「価値のすべての本質的規定」をみいだそうとしており、したがって、「生理学的な意味での人間的労働力の支出」(同上, S. 51. (1) 94頁)が「商品価値を形成する」(同上頁)と考えることになった²⁾。

しかし、同じ個人の「質的に異なる有用的労働」の諸成果である「質的に異なる使用価値」は、たがいに商品として相対しえないし、それ自体としては価値をもたない。すなわち、異なるものが商品として相対する条件は、それらのものが「質的に異なる有用的労働」の生産物であるということに帰着するわけではない。このことは、交換関係において相対する諸生産者の労働の質的な違いを、「有用な諸形態の違い」に還元してはならないということの意味する。「質的に異なる有用的労働の生産物」がたがいに交換され、したがって、価値をもつのは、たがいに独立な異なる個人の間においてであり、それらのものがたがいに独立な異なる個人の「有用的労働」の諸成果であるかぎりにおいてである。だから、「質的に異なる有用的労働」の生産物の価値としての同等性は、それらの生産者がたがいに独立であり、したがって、彼らの労働もたがいに独立であることにもとづいているのであって、彼らの労働自体のあいだの一定の関係にもとづいているわけではなく、まして、彼らの労働自体の量的な同等性にもとづいて

2) 以上の点については、拙稿「『交換価値』を労働に還元する論理の難点——マルクス価値論の批判(1)——」(桃山学院大学『経済経営論集』第15巻第1号, 1973年6月)の第8節「異なる生産者の労働の質的な違いは『有用な諸形態の違い』に帰着するか?」を参照していただきたい。

いるわけではないのである³⁾。

【2】 諸生産物が同じ価値の諸商品として相対する条件と労働時間

いろいろなものの価値としての同等性が、それらの生産に必要な労働時間の同等性を前提しないということは、それらのものが同じ価値の諸商品として相対する条件、したがって、それらのものの所有者が、それらのものを同じ価値の諸商品として交換しようとする動機を検討すれば、明らかになるはずである。では、その動機は何か？人々は、たがいに独立であり、したがって、どの人の行為も相手の人の意志によって拘束されないかぎりでのみ、彼らの労働の成果を交換しあうのだから、各人を他人との交換関係に導く動機は、彼が交換によって得ると感ずる彼自身の利益以外にはないであろう。ある人が、彼の所有するものと他のものとの交換を、彼の期待よりは不利な比率で行う必要に迫られることがあるとしても、彼は、他人の必要ではなく彼自身の必要に迫られるのである。もし、彼がこの交換は彼自身に利益をもたらさないと判断すれば、この交換は行われまいであろう。

こうして、人々が彼らの労働の成果を交換しあうのは、彼らのうちのどの人も交換によって利益を得ると感ずるかぎりにおいてであるが、交換によって得られる各人の利益（余分のもの）は、交換される物とその生産に

3) 友岡学氏は言う。「……交換し合う諸個体は、それぞれ独自の個（体）性を維持しなければならない……。……それぞれが独自の系としての時間・空間に存在する、ということである。このことは価値論の特に等価交換についての従来の考え方に訂正をもたらさずにはおかないだろう。等価交換の思想では、相等しいものが交換される、が、交換以前に相等しいということは証明され得ないことである。」（友岡学「経済学への提議(4)」鹿児島県立短期大学『紀要』第14号、1963年、33—34頁）

交換しあう人びとの労働の異質性が、物理学的な意味での「時間空間の相対性」（同上、39頁）によって説明できるとは思えない——友岡氏がそうしていると言いきれるわけではない——が、私は、友岡氏の諸論稿からきわめて多くの示唆を得た。

必要な労働時間との関係にかんするかぎり、彼が必要とする物を自分で直接に獲得するときに比べて、ヨリ多くの有用物を、自分の同じ労働時間によって獲得しうるということ、言いかえれば、同量の有用物を獲得するために費やす自分の労働時間がヨリ少ないということ以外にはありえないであろう。このことは、各人が他人に供給するものの生産に要する自分の労働時間が、彼が他人から供給される彼の必要物を彼自身が生産したばあいには要するはずの自分の労働時間よりも小さいということによって生ずる。

このように、各人が自分の所有物を他人の所有物と交換することによって得る利益は、彼の所有物の生産に必要な自分の労働時間が、彼が受けとる他人の所有物を自分で生産したばあいには必要な自分の労働時間よりも小さく、したがって、彼が必要とする有用物を獲得するために必要な自分の労働時間を省くことができるという点にある。この利益は、自分の労働時間と他人の労働時間との関係には何のかかわりもない。すなわち、人々が異なるものを同じ価値の諸商品として交換しあう動機は、これらのものの生産に必要な労働時間をあい等しくするようなものではないのである。

たとえば、ある人（A氏と呼ぼう）は、1羽の兎をとらえるために r_a 時間を必要とし、壺1杯のハチミツを採るために h_a 時間を必要とするが、他の人（B氏と呼ぼう）は、1羽の兎をとらえるために r_b 時間を必要とし、1杯のハチミツを採るために h_b 時間を必要とするばあいに、A氏の兎とB氏のハチミツとが、兎1羽にたいしてハチミツ x 杯の割合で交換されるものとしよう。A氏がこのような交換をしたのは、それによって彼が獲得するハチミツ x 杯が、彼の提供する兎1羽をとらえるために彼が要した r_a 時間と同じ時間で彼が採りうるハチミツ r_a/h_a 杯よりも多い（ x 杯 $>$ r_a/h_a 杯）からであり、B氏がこのような交換をしたのは、それによって彼が獲得する兎1羽が、彼の提供するハチミツ x 杯を採るために彼が要した xh_b 時間と同じ時間で彼がとらえる兎 xh_b/r_b 羽よりも多い（1羽 $>$ xh_b/r_b

羽) から、または、同じことだが、彼の提供するハチミツ x 杯が、彼の受けとる兎 1 羽を彼がとったばあいに必要な r_b 時間と同じ時間で彼が採りうるハチミツ r_b/h_b 杯よりも少ない (x 杯 $< r_b/h_b$ 杯) からであろう。したがって、A 氏の兎と B 氏のハチミツとが、兎 1 羽にたいして、 r_a/h_a 杯よりは多く r_b/h_b 杯よりは少ない量のハチミツの割合で、交換されるならば、彼らのいずれも、交換が行われないうきに比べて、ヨリ多くの必要物を、自分の同じ労働時間によって獲得することができる。このことは、A 氏が兎を提供し B 氏がハチミツを提供するような型の交換が行われるためには、 $r_a/h_a < r_b/h_b$ という条件が必要であることを意味する。(逆に、A 氏がハチミツを提供し B 氏が兎を提供するような型の交換が行われるためには、 $r_a/h_a > r_b/h_b$ という条件が必要である。) 以上に述べたことは、表 1 に要約して示した。二人の人が、兎とハチミツとを同じ価値の諸商品とし

表 1 兎とハチミツとの交換の成立条件 (1)

	兎 提 供 者 (A 氏)	ハチミツ提供者 (B 氏)
兎 1 羽に必要な労働時間	r_a 時間	r_b 時間
ハチミツ 1 杯に必要な労働時間	h_a 時間	h_b 時間
各人が一定時間で直接に獲得しうる物	A 氏の r_a 労働時間 $\left\{ \begin{array}{l} \text{兎 1 羽} \\ \text{または、ハチミツ } r_a/h_a \text{ 杯} \end{array} \right.$	B 氏の xh_b 労働時間 $\left\{ \begin{array}{l} \text{兎 } xh_b/r_b \text{ 羽} \\ \text{または、ハチミツ } x \text{ 杯} \end{array} \right.$
兎 1 羽とハチミツ x 杯と換の交	兎 1 羽を支出 \downarrow ハチミツ x 杯を獲得	ハチミツ x 杯を支出 \downarrow 兎 1 羽を獲得
この交換の成立条件	$x \text{ 杯} > r_a/h_a \text{ 杯}$	$1 \text{ 羽} > xh_b/r_b \text{ 羽}$ $(x \text{ 杯} < r_b/h_b \text{ 杯})$
	$\frac{r_a}{h_a} < x < \frac{r_b}{h_b}$	

て交換しあう条件が、これらのものの生産に必要な二人の労働時間のあいだの関係にはかわりがないことは、これで明らかであろう。多くのばあいには、二人の同じ労働時間の諸生産物が同じ価値の諸商品として交換されるということは、どちらかの人にとって損となり、したがって成立しないのである。

A氏とB氏とが、A氏の兎1羽とB氏のハチミツ x 杯とを交換し、したがってこれらのものの価値をあい等しくする彼らの動機は、各人が同じ有用物を獲得するために要する彼自身の労働時間の短縮として表現することもできる。A氏がこのような交換をするのは、兎1羽をとらえるのに要した自分の r_a 労働時間が、彼の受けとるハチミツ x 杯を彼自身が採ったばあいに必要な自分の xh_a 労働時間よりも小さい(r_a 時間 $<xh_a$ 時間)からであると言ってもよく、また、B氏がこのような交換をするのは、ハチミツ x 杯を採るのに要した自分の xh_b 労働時間が、彼の受けとる兎1羽を彼自身がとったばあいに必要な自分の r_b 労働時間よりも小さい(xh_b 時間 $<r_b$ 時間)からであると言ってもよい。したがって、異なるものの価値があい等しくなるのは、各交換者がこれら同じ価値のものすべてを生産したばあいに必要な彼自身の諸労働時間が不等になることを条件とする。このことは、表2に要約して示した。

表2 価値等式の成立条件 (1)

価値等式	「兎1羽の価値」=「ハチミツ x 杯の価値」 \therefore 「A氏の r_a 労働時間の生産物の価値」 =「B氏の xh_b 労働時間の生産物の価値」	
A氏にとっての 必要条件	「A氏の r_a 労働時間」 $<$ 「A氏の xh_a 労働時間」	$\frac{r_a}{h_a} < x < \frac{r_b}{h_b}$
B氏にとっての 必要条件	「B氏の r_b 労働時間」 $>$ 「B氏の xh_b 労働時間」	

いま述べたことは、具体的な例を考えてみるともっとわかりやすくなる。たとえば、ある人（A氏）は、兎1羽をとらえるために2時間を必要とし、ハチミツ1杯を採るために5時間を必要とするが、他の人（B氏）は、兎1羽をとらえるために10時間を必要とし、ハチミツ1杯を採るために8時間を必要とするものとしよう。このばあい、A氏は、同じ2時間で、兎1羽またはハチミツ0.4杯を生産することができ、B氏は、同じ8時間で、兎1羽またはハチミツ1.25杯を生産することができる。したがって、A氏の兎とB氏のハチミツとが、兎1羽にたいして、0.4杯よりは多く1.25杯よりは少ない量のハチミツの割合で、たとえば兎1羽にたいしてハチミツ0.7杯の割合で、交換されるならば、どちらの人も、交換が行われないうきに比べてより多くのものを、自分の労働時間を増やすことなしに獲得することができる。A氏は、兎1羽をとらえるのと同じ時間で0.4杯のハチ

表3 兎とハチミツとの交換の成立条件 (2)

	兎 提 供 者(A氏)	ハチミツ提供者 (B氏)
兎1羽に必要な労働時間	2時間	10時間
ハチミツ1杯に必要な労働時間	5時間	8時間
各人が一定時間で直接に獲得しうる物	A氏の2労働時間 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> { 兎1羽 または、ハチミツ0.4杯 </div>	B氏の5.6労働時間 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> { 兎0.56羽 または、ハチミツ0.7杯 </div>
兎1羽とハチミツ0.7杯との交換	兎1羽を支出 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> ↓ ハチミツ0.7杯を獲得 </div>	ハチミツ0.7杯を支出 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> ↓ 兎1羽を獲得 </div>
この交換の成立条件	$0.7\text{杯} > 0.4\text{杯}$	$1\text{羽} > 0.56\text{羽}$
	$0.4\text{杯} < 0.7\text{杯} < 1.25\text{杯}$	

ミツしか採ることができないが、兎1羽をB氏に提供することによって、B氏からハチミツ0.7杯を受けとることができる。B氏は、ハチミツ0.7杯を採るのと同じ時間で兎0.56羽しかとらえることができないが、ハチミツ0.7杯をA氏に提供することによって、A氏から兎1羽を受けとることができる⁴⁾。以上に述べたことは、表3に要約して示した。

A氏は、この交換関係において同じ価値をもつ兎1羽とハチミツ0.7杯とを何れも自分で生産するためには、それぞれ2時間と3.5時間とを必要とする。彼は、この交換において、彼の2時間の労働の生産物である兎1羽を支出することによって、彼自身が生産したならば3.5時間の自分の労働を必要としたはずのハチミツ0.7杯を獲得するわけである。だから、彼は、この交換によって、ハチミツ0.7杯を獲得するために必要な自分の労働時間を1.5時間省くことができる。他方、B氏は、この交換において、彼の5.6時間の労働の生産物を支出して、彼自身が生産したならば10時間の自分の労働を必要としたはずの兎1羽を獲得する。だから彼は、この交

表4 価値等式の成立条件 (2)

価値等式	「兎1羽の価値」＝「ハチミツ0.7杯の価値」 \therefore 「A氏の2労働時間の生産物の価値」 ＝「B氏の5.6労働時間の生産物の価値」	
A氏にとっての 必要条件	「A氏の2労働時間」 < 「A氏の3.5労働時間」	0.4杯<0.7杯<1.25杯
B氏にとっての 必要条件	「B氏の10労働時間」 > 「B氏の5.6労働時間」	

4) マルクスは、「使用価値については両方の交換者が得をすることができるとしても、彼らが両方とも交換価値で得をすることはできない」（『資本論』 Bd. I, S. 165. 岩⁽²⁾29頁）と言っているが、「使用価値については両方の交換者が得をする」ということは、どの交換者も、ある時間をかけた自分の生産物と引きかえに、同じ時間に自分で生産しうる量よりも多くの他の有用物を獲得することによってしか生じえないであろう。

換によって、兎1羽を獲得するために必要な自分の労働時間を4.4時間省くことができる。したがって、兎1羽にたいしてハチミツ0.7杯の割合での交換は、その必要物を獲得するために要する各人の労働時間にかんするかぎり、どちらにとっても利益をもたらす。そして、交換者たち双方に利益をもたらさないような交換は行われえないであろう。以上に述べたことは、表4に要約してある。

このように、労働時間とそれによって獲得しうる物との関係にかんするかぎり、各人にとっての交換の利益は、彼が提供するものの生産に必要な自分の労働時間が、彼が受けとるものを彼自身が生産したばあいに必要な自分の労働時間よりも短いということ、したがって、その必要物を獲得するために要する自分の労働時間を省くことができるということにはかならない。だから、兎1羽とハチミツ0.4杯との何れを生産するためにも同じ労働時間を必要とす人は、これらのものを同じ価値の諸商品にするような交換には加わらないであろう。彼は、彼が2時間の労働をかけてとった兎1羽との交換によってハチミツ0.4杯を獲得することよりは、自分の2時間の採集労働によって直接にハチミツ0.4杯を獲得することのほうを選ぶであろう。交換という行為自体のための特別の手間や苦労なども考えたら、このような割合での交換は彼にとって損である。まして、この人は、彼の2労働時間の生産物である兎1羽を、彼が2時間で生産しうる0.4杯のハチミツよりも少量のハチミツと交換するようなことはしないであろう。彼は、たとえば兎1羽を他人に提供することによってハチミツ0.2杯を獲得するよりは、彼自身の1時間の採集労働によって直接にハチミツ0.2杯を獲得するほうを選ぶであろう。そして、兎1羽とハチミツ0.2杯とが同じ価値をもつとしたら、彼は、むしろハチミツの供給者になることによって利益を得る。ただし、B氏がこのような交換比率で兎を供給することは、B氏にとって損である。だから、A氏とB氏との間では、

どちらが兎供給者になるにせよ、兎1羽とハチミツ0.2杯との割合での交換は行われえない。

したがって、人びとがたがいに異なるものを交換し、それらの価値をあい等しくするばあいには、各人がそれらすべてを生産したばあいに必要な彼自身の諸労働時間はあい等しくない。各人は、同じ価値をもつ諸有用物のうち、彼が最も短い時間で生産しうるものを供給することによって利益を得る。言いかえれば、異なるものの価値比率は、それらのものの所有者の各人がそれらのものすべてを生産したばあいの彼自身の諸労働時間の比率とは異なるように定まる。たとえば、同じ労働時間で、兎1羽、またはハチミツ m 杯、または魚 n 匹などを生産しうる人は、それらの価値があい等しくないばあいにのみ、それらのものの交換から利益を得る。彼は、それらのうちで最も大きな価値をもつものを供給することによって最も大きな利益を得る。だから、各交換者にとっては、さまざまな種類のものを生産するために必要な彼自身の諸労働時間の比率は、これらのものの価値比率がそこから背離すべき基準となる。それ故、人びとが彼らの所有物を交換しあうのは、各人がそれらすべてを交換したばあいに必要な彼自身の諸労働時間の比率が、同様な他人の諸労働時間の比率に等しくないかぎりでのことである。たとえば、ある人が同じ2時間で兎1羽またはハチミツ0.4杯を生産することができ、他の人も同じ2時間で兎1羽またはハチミツ0.4杯を生産することができるならば、彼らの間では兎とハチミツとの交換は成立しえないであろう。

こうして、各人をさまざまなものの交換関係に参加させる彼自身の利益は、彼がそれらのものすべてを生産したばあいに必要な彼自身の諸労働時間のあいだの関係にかかわるものであって、彼の労働時間と他人の労働時間との関係には何のかかわりもないのだから、人々がさまざまなものを同

じ価値の諸商品として交換しあうための条件は、これらのものの生産に必要な彼らの労働時間があい等しいかどうかということには何のかかわりもないのである。たとえば、A氏の2時間労働の生産物である兎1羽が、B氏の5.6時間労働の生産物であるハチミツ0.7杯と交換されることは、どちらにとっても利益をもたらしたが、A氏の2時間労働の生産物である兎1羽が、B氏の同じ2時間労働の生産物であるハチミツ0.25杯と交換されることは、B氏にだけ利益をもたらす、A氏には損をもたらす。A氏は、彼の2時間労働の生産物である兎1羽を、彼自身が1.25時間で生産しうるハチミツ0.25杯と交換するようなことはしないであろう。また、この例に与えられた前提条件のもとでは、A氏の10時間労働の生産物であるハチミツ2杯がB氏の10時間労働の生産物である兎1羽と交換されることも、A氏にとっては損である。この前提条件のもとでは、A氏とB氏とが、同じ労働時間の諸生産物を同じ価値の諸商品として交換することは起りえないのである。

しかし、ハチミツ1杯の生産に必要なB氏の労働時間が8時間から2.86時間に短縮し、他のすべての必要時間は変わらないとしたならば、ハチミツ0.7杯の生産に必要なB氏の労働時間は、兎1羽の生産に必要なA氏の労働時間に等しくなり、しかも、これらの同じ2時間労働の諸生産物の交換は、双方に利益をもたらす。だが、このような条件は偶然にしか成り立たないし、しかも、この条件のもとでも、同じ2時間労働の諸生産物の価値があい等しくならざるをえないような必然性は存在しない。この条件のもとでは、兎1羽にたいして、0.4杯よりは多く3.5杯よりは少い範囲にあるハチミツの量という交換比率であればどれでも、交換者たち双方が利益を得る。このことは、いろいろなものの交換比率が、それらの生産に必要な労働時間は変化しなくても、広い範囲内で変化しうることを意味する。

要するに、諸生産物の価値は、それらの生産に必要な労働時間によって規定されないだけでなく、これらの労働時間にはかかわりなく変化しう

る社会的な大きさなのである。前の例では、兎とハチミツとの交換が、兎1羽にたいして、0.4杯よりは多く1.25杯よりは少い範囲にあるハチミツの量という比率で行われれば、交換者たち双方が利益を得た。実際の交換比率は、相手の所有物をヨリ強く需要する者にとって不利な方の限界に片寄るであろう。

ある人が他人の供給物と同じものを生産しえないという極端な場合については、彼がその生産に必要なとする労働時間を無限大として考えればよい。たとえば、兎供給者はハチミツ1杯の生産に無限時間を必要とし、ハチミツ供給者は兎1羽の生産に無限時間を必要とすると仮定すれば、兎とハチミツとの交換比率は、兎1羽にたいして、ハチミツ0杯よりは多くハチミツ無限杯よりは少ない範囲内に決まりうる。交換のバランスは、どちらが相手の所有物をヨリ強く必要としているかによって、自分に不利な方向に傾くであろう。しかし、実際には、各人が他人の供給物と同じ物を生産しえない場合よりも、一定の交換関係のもとで、彼がそれを生産することは彼にとって損であり、それ故に事実上ありえなくなっている場合の方がずっと多いであろう。

これまで、「労働時間」という言葉をむぞうさに使ってきたが、あるものの一単位を生産するために必要なある人の労働時間がつねに同じであるとはかぎらない。たとえば、ある人が毎日8時間で兎4羽をとるばあい、彼は、最初の1羽を2時間でとり、次の1羽を1時間でとり、第三の1羽を2時間でとり、第四の1羽を3時間でとるようなこともありえよう。このばあい、彼が兎1羽をとるために平均的に必要とする労働時間は2時間である。これが、兎1羽の生産に必要な彼の「労働時間」だと考えてよいであろう。もし、彼が第五の1羽をとるために4時間を必要とするならば、彼は、ハチミツをあと0.7杯手に入れるためには、兎をもう1羽つかまえて、それとの交換によって0.7杯のハチミツを手に入れるよりは、それを、

自分の3時間半の採集労働によって直接に手に入れることを選ぶであろう。

(ただし、彼がそのときには0.7杯のハチミツを採るのに4時間以上の労働時間を必要とするならば別である。)

各人の交換動機についての以上の考察は、二人の人たちがたがいにならぬ所有物を交換しようということを想定して行なわれたが、どの商品も貨幣と交換され、また、彼らのほかにも多くの商品生産者がいることを考慮しても、各人の交換動機についての結論は変らない。たとえば、A氏は同じ2時間の彼の労働によって、兎1羽、またはハチミツ0.4杯、または魚2匹などを生産するものと仮定しよう。もし、これらのものが何れも同額の貨幣と交換され、したがって、これらのものの価値はあい等しいとしたならば、彼は、たとえば兎を生産して、それをハチミツまたは魚と交換しても、何の利益も得ないであろう。これらのものが異なる大きさの価値をもつばあいにはのみ、彼は、それらのうちで最も大きな価値をもつものを生産し、それを他のものと交換することによって、利益を得る。たとえば、兎1羽、ハチミツ0.7杯、および魚4匹が同じ価値をもち、したがって、兎1羽、ハチミツ0.4杯、魚2匹が価値としてはたがいに $1 : 0.57 : 0.5$ の割合の大きさであるならば、彼は、兎を生産したときに、同じ労働時間で最も大きな価値の商品を生産することができる。そして、彼は、兎1羽を売ることによって得た貨幣で、必要に応じて、ハチミツ0.7杯、または魚4匹、またはハチミツ0.35杯プラス魚2匹などを獲得することができる。何れにしても、彼は、交換によって、彼の必要物を獲得するために必要な自分の労働時間を省くことができるのである。

【3】 労働価値説と比較生産費説

アダム・スミスの労働価値説の欠陥は、もはや明らかであろう。彼は言う。

「ストックの蓄積にも土地の私有化にも先だつ初期未開の社会状態においては、いろいろな物を獲得するために必要な労働量の比率は、これらの物をたがいに交換するための何らかの規則を与えることができるただ一つの事情であるようにみえる。たとえば、狩猟民族の間では、1匹のビーバーを殺すことが、通例、1頭の鹿を殺すために要する労働の2倍を要するとしたら、1匹のビーバーは当然に2頭の鹿と交換される、または2頭の鹿の価値があることになろう。通例2日または2時間の労働の生産物であるものは、通例1日または1時間の労働の生産物であるものの2倍の価値があるということは当然である。」⁵⁾

スミスが、ここで、1匹のビーバーを殺すために必要な労働と、1頭の鹿を殺すために必要な労働とを比較していることは明らかであるが、彼が、誰の労働と誰の労働とを比較しているかは明らかではない。諸労働の主体を区別しないことは、労働価値説の一つの特徴であるともいいうる。しかし、何れにしても、「いろいろの物を獲得するために必要な労働量の比率」がこれらの物の価値比率を規定しないことはたしかである。

なぜならば、すでに述べたように、各人を他人との交換関係にはいらせる動機は、彼の供給物の生産に必要な自分の労働時間が、彼の受けとるものを彼自身が生産したばあいに必要な自分の労働時間よりも小さいということにもとづいているのであり、自分の労働時間と他人の労働時間との関係にはかかわりがないのである。したがって、ビーバー1匹および鹿1頭の生産に必要な異なる人びとの労働時間の比率は、これらのものの価値比率を規定しないし、これらのものの生産に必要な同じ人の労働時間の比率は、決してこれらのものの価値比率と一致しない。だから、人々が、たとえばビーバー1匹と鹿2頭とを交換しあうということは、各人がこれらの

5) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Modern Library Edition, p. 47. 大内兵衛訳『国富論』岩波文庫(旧版), (1) 100頁。訳文責は引用者にある。

ものを生産したばあいに必要な彼自身の労働時間の比率が、同様な他人の労働時間の比率に等しくないかぎりで起こりうる。以上から明らかなように、ビーバー1匹を殺すための労働時間と鹿1頭を殺すための労働時間との比率が「通例」2 : 1であるということは、これらのものの価値比率が2 : 1になるかどうかということとは何の関係もないか、または、交換による利益が誰にも存在せず、したがって、価値比率自体が成立しないことを意味するかの何れかである。

諸個人間の交換を成立させる各個人の動機についてのこれまでの説明は、国際貿易を成立させる各国の動機についてのリカードゥの説明にあらわれたいわゆる「比較生産費の原理」の応用にほかならない。しかし、リカードゥ自身は、すでにみたスミスの労働価値説をスミス以上に一貫して主張した上で、この「比較生産費の原理」を、国際的交換に特有なものとして述べている。すなわち、彼はその主著『経済学および課税の原理』の第7章「外国貿易について」で、イギリスの100人の労働によって生産される羅紗と、ポルトガルの80人の労働によって生産される葡萄酒との交換によって、イギリスは、その100人の労働の生産物とひきかえにその120人の労働を要したはずの葡萄酒を獲得し、ポルトガルは、その80人の労働の生産物とひきかえに、その90人の労働を要したはずの羅紗を獲得し、したがって、この交換は、双方にとって利益をもたらすという例を述べている。そして、彼は、「こうして、イギリスは、80人の労働の生産物にたいして100人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は、同じ国の諸個人の間では行われえないはずである。……この点についての単一国と多数国との違いは、資本がより有利な用途を求めて一国から他国へ移動するときの困難と、それが同じ国において一地方から他の地方へいつも動くときの活発さとを考えると、容易に証明されうる。」⁶⁾と言っている。

6) David Ricardo, *On the Principles of political Economy and Taxation*, The

る。

しかし、ある国が資本移動を禁止する場合を別とすれば、資本が移動するときの困難という点においては、諸国間の資本移動と一国内の諸地方間の資本移動とは、本質的に違っているわけではなく、その程度においてのみ違っているにすぎない。あるばあいには、後者の方が前者よりも困難でありうる。そのために、ある国の一定量の資本が、その国内の低開発地方からの誘いを避けて外国へ移動することもありえよう。諸国間の移動にせよ、一国内の地方間移動にせよ、資本の移動自体は、多かれ少なかれ、つねに費用を要するものであり、このことが、資本の移動——この場合は空間的移動——を妨げる経済的障壁となっているのである。

しかも、資本は、ともかくも、商品とともに、一国内でも、諸国間でも移動しうるが、人間の個性または各個人の能力は、投資者としての能力も含めて、諸個人間を移動しえない。したがって、人々の個性または諸個人の能力は、決してたがいに等質ではありえない。たがいに独立の諸個人間で商品交換が行われるのは、そのためであろう。

皮肉なことに、リカード自身が、二国間の貿易が両国に利益をもたらしうることを説明するために、適切にも、二人の個人間の交換が双方に利益をもたらしうるという例を脚注で述べている。彼は言う。

「二人の人が双方とも靴と帽子とをつくることができ、そして、一人は他の人にたいして両方の仕事で優れているが、帽子づくりでは、彼はその競争者を5分の1すなわち20パーセントだけしかしのぐことができず、靴づくりでは、彼はその競争者に3分の1すなわち33パーセントまさっているばあい、優れた人がもっぱら靴づくりに従事し、劣った人が帽子づくりに従事することは、双方の利益ではないだろ

Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. 1, Cambridge 1970, pp. 135-136. 小泉信三訳『経済学及び課税の原理』岩波文庫、上巻、133—134頁。訳文責は引用者にある。

うか？」⁷⁾

このように、リカードゥは、二国間の分業を成立させる両国の動機を説明するために、二人の個人間の分業を成立させる二人の動機を説明している。しかも、この例では、「一人は他の人にたいして両方の仕事で優れている」のだから、一人が一定時間で生産した靴は、他の人がより長い時間で生産した帽子と交換されることになる⁸⁾。リカードゥは、この説明の直前に、「このような交換は、同じ国の諸個人の間では行われえないはずである」と言い、また、「一国内において諸商品の相対的価値を規制する同じ法則は、二つまたはそれ以上の諸国の間で交換される諸商品の相対的価値を規制しない」⁹⁾と言ったばかりであるが、彼自身のこの説明から出てくる結論は、「一国内において諸商品の相対的価値を規制する同じ法則」こそが、「二つまたはそれ以上の諸国の間で交換される諸商品の相対的価値」を規制するということであろう。もともと、国際貿易の実体は、国籍の異なる諸個人間の交換にほかならないのだから、個人間の交換にあてはまらないことが国際貿易にあてはまるはずはないのである。

スミスの労働価値説は、リカードゥによる精製を経て、マルクスによっ

7) Ibid., p. 136. fn. 同上訳, 上, 134頁。

8) このリカードゥの例では、「劣った人」が帽子1個および靴1足を生産するために必要な労働時間を、それぞれ h_i 時間および s_i 時間とすると、「優れた人」の同様な労働時間は、それぞれ $\frac{5}{6}h_i$ 時間および $\frac{3}{4}s_i$ 時間になる（後者は、 h_i 時間で帽子 $\frac{6}{5}$ 個を、 s_i 時間で靴 $\frac{4}{3}$ 個を生産する）。したがって、このばあい、帽子1個と交換される靴の量 x 足は、次の式で与えられる範囲内にある。

$$\frac{h_i}{s_i} < x < \frac{10}{9} \cdot \frac{h_i}{s_i}$$

この式から、帽子1個の生産に必要な「劣った人」の h_i 労働時間は、それと同じ価値をもつ靴 x 足の生産に必要な「優れた人」の $x \frac{3}{4} s_i$ 労働時間よりも大きいことが明らかになる。

9) Ibid., p.133. 同上訳, 上, 131頁。

て受けつがれただけではない。それは、何人かの近代経済学者たちによっても、さまざまな形で受けつがれている。このことは、労働価値説が十分に適切には批判されていないことを示すものかもしれない。

たとえば、K. E. ボールディングは、その優れた教科書“Economic Analysis”で、「ただ二つの商品だけが存在する非常に単純な経済のモデル」では、「われわれはアダム・スミスに従ってよいであろう」¹⁰⁾とさえ言って、「たとえば、狩猟民族の間では、1匹のビーバーを殺すことが、通例、1頭の鹿を殺すために要する労働の2倍を要するとしたら、1匹のビーバーは当然に2頭の鹿と交換される、または2頭の鹿の価値があることになるだろう」というスミスの文章を引用し、それについて次のように解説している。

「……鹿の猟師がビーバーの猟師となること、またその逆も、たぶん容易である。特に指定されない一定の労働量が鹿2頭またはビーバー1匹を生産する。そのとき、交代的生産費用はビーバー1匹あたり鹿2頭、または鹿1頭あたりビーバー1/2匹である。

では、なぜ市場でビーバー1匹が鹿2頭と交換されなければならないのか？この種の多くの問題におけるように、答は、もし市場における交換比率がビーバー1匹に鹿2頭ではないとしたら、何が起るであろうかとたずねることによってみいだされる。たとえばビーバー1匹が市場で鹿3頭と交換されると想定しよう。鹿の猟師たちは、森で鹿2頭を捕えるのと同じ努力によって森でビーバー1匹を捕えることができ、つぎに市場で、このビーバー1匹が3頭の鹿をもたらすということを間もなく発見するであろう。このような状況の下では、鹿『産業』は急速に衰退し、ビーバー『産業』はそれに対応して増大するであろう。間もなく市場に流入してくるビーバーの数は増加し、鹿の数は減少するであろう。ビーバーの価格（ビーバー

10) Kenneth E. Boulding, *Economic Analysis*, 4th Edition, Vol. 1: Microeconomics, Maruzen Asian Edition, pp. 52-53. 大石泰彦・宇野健吾監訳『微視経済学』上, 丸善株式会社, 59頁。訳文責は引用者にある。力点は引用者による。

1匹あたりの鹿の数)は下落するであろう……。市場でビーバーの価格が、ビーバー1匹あたり鹿2頭に下落したとき、鹿産業からビーバー産業に移ることはもはやひきあわず、市場に流入する鹿の数の減少も、ビーバーの数の増加も止まり、価格は安定したままにとどまるであろう。」¹¹⁾

ボールディングが、ここで、「鹿の猟師たちは、森で鹿2頭を捕えるのと同じ努力によって森でビーバー1匹を捕えることができ」と想定しているだけではなく、ビーバーの猟師も、ビーバー1匹を捕えるのと同じ努力によって鹿2頭を捕えることができると想定していることは、明らかであろう。彼が、「特に指定されない一定の労働量が鹿2頭またはビーバー1匹を生産する」と言うとき、その労働は誰の労働でもよいと考えられているのであろう。しかし、そのようなばあいには、もともと交換の利益は誰にも存在しないはずである。鹿2頭を捕えるのと同じ努力によってビーバー1匹を捕えることのできる人が、まず鹿を捕えて、それをビーバー1匹と交換しなければならない理由がどこにあるのか？この人が鹿2頭をもって市場へ行くのは、鹿2頭とひきかえに1匹よりも多い数のビーバーを獲得できる場合だけであろう。この人は、鹿2頭とひきかえにビーバー1匹だけしか得ることができないとわかれば、鹿を捕えずにビーバーを捕えるであろう。交換という行為自体のための特別の手間や、思いがけない損失の心配などを考慮したら、このような比率での交換は、彼にとっては損であろう。

こうして、鹿2頭を捕えるのと同じ努力によってビーバー1匹を捕えることのできる人が、まず鹿2頭を捕えて、それをビーバー1匹と交換するという想定は不合理であるが、まして、この人が、一時的にせよ、鹿3頭とひきかえにビーバー1匹を得るという想定は不合理であろう。ボールデ

11) Ibid., p. 53. 同上訳書, 上, 59—60頁。

ィング自身も、個人が自分の欲する物を、直接に獲得する（自給する）か、または、あらかじめ他人の欲する物を生産して、それとの交換によって獲得するかということは、「どちらが彼の欲する商品を獲得するのにヨリ容易な方法であるかということによって決まる」¹²⁾ と言っているではないか。労働時間にかんするかぎりには、あるものを獲得するのに「ヨリ容易な方法」とは、それを獲得するのにヨリ短い労働時間を要する方法であろう。もちろん「どちらがヨリ容易な方法であるかということはどう定義するかは、金銭的考慮だけによって通常決まるわけではなく、それぞれの交代的方法の全利害の評価を含んでいる」¹³⁾ ことはたしかであるが、このことは、各個人についてだけでなく、各民族についてもあてはまるであろう。

こうして、自給か交換のための生産かについての各個人の選択が、どちらが彼の必要物の獲得のための「ヨリ容易な方法」であるかによって決まるということは、個人と個人との分業にも「比較優位の原理」が妥当することを意味する。国際分業に「比較優位の原理」が妥当するのも、自給かまたは交換のための生産かについての各国の選択が、どちらが「ヨリ容易な方法」であるかによって決まるからであろう。言いかえれば、国際貿易に「比較優位の原理」が妥当するのは、どの国も、自分にとって利益がないような交換をしないからであろう。

実際に、ボールディングは、この「交換と特殊化とを支配する一般原理」¹⁴⁾との関連において、「比較優位の原理」を、やはり諸個人間の取引を例にあげて、説明している。すなわち、彼は、「交換で得られる商品を、彼がそれを獲得する相手の人よりも能率的に生産することができる個人の場合においてさえ、特殊化と交換が生じうるということに注目することが

12) Ibid., p. 26. 同上訳書, 上, 28頁。

13) Ibid., p. 26. 同上訳書, 上, 29頁。

14) Ibid., p. 26. 同上訳書, 上, 28頁。

肝要である」¹⁵⁾ と言って、庭師の3時間の労働を要する庭仕事を1時間でなしうる医者が、庭師への支払いに必要な3ドルを彼の診療室において1時間よりも短い時間(18分間)で稼ぐことができるならば、彼は、庭で1時間働くよりも、診療室で1時間働いて、それによる稼ぎの一部分で庭師の3時間の労働にたいして支払った方が得であるという例を述べている¹⁶⁾。

しかし、この例が、すでにミタリカードゥの「一人は他の人にたいして両方の仕事で優れている」という例によく似ていることは興味深い。ボールディングが、ここで、「比較優位の原理」を、諸個人間の交換に一般に妥当するものとして述べているのか、または、「交換で得られる商品」を、彼がそれを獲得する相手の人よりも能率的に生産することができる個人の場合においてさえ、特殊化と交換が生じうること」を説明しうるにすぎないものとして述べているのかも、はっきりしていない。だが、彼が、後で、「価格体系の基本的模型」(第1部第4章の標題)について述べる時になると、彼はスミスの労働価値説を支持していることが明らかになる。そして、彼は、この労働価値説にもとづいて、各狩猟民族の中では、人々の「交代的生産費用」が同じであることを前提し、したがって、ある狩猟民族が「一定の期間に1人あたりビーバー5匹または鹿10頭を生産することができる」¹⁷⁾ ことを想定した上で、二つの国の「交代的生産費用」が同じであるならば、両国の間での貿易は双方にとって有利ではないという見解を述べ、「これが27ページで述べた比較優位の原理である」¹⁸⁾ と言っている。「比較優位の原理」または「比較生産費の原理」にかんするかぎり、ボールディングが、ミタリカードゥの見解を、それに伴う一切のものを含めて、したがって、労働価値説をも、労働価値説とは矛盾する見解をも、

15) Ibid., p. 27. 同上訳書, 上, 29頁。

16) Ibid., p. 27. 同上訳書, 上, 29—30頁。

17) Ibid., p. 54. 同上訳書, 上, 60頁。

18) Ibid., p. 60. 同上訳書, 上, 68頁。

受けついだことは、もはや明らかであろう。

もう一つ興味深いことは、ボールディングが、「ビーバーで表わした鹿の交代的生産費用」について、「これは29ページでクルーソー経済について展開されたものと同じ概念である」¹⁹⁾ と言っていることである。その29ページでは、彼は、マルクスの『資本論』でもおなじみのロビンソン・クルーソーを例にあげて、「もし、10匹の魚をつかまえるのに彼が捧げる時間とエネルギーとで、彼は2羽の兎をつかまえることができたとするならば、ある意味で、彼は兎2羽を魚10匹と交換したのである」²⁰⁾ と言い、さらに、「もし、諸資源が限定されているならば、一つのものの生産を x だけ増やすことは、われわれに他のものの生産を y だけ減らすことを余儀なくさせるであろう。この比率 x/y は、いわば、生産における交換比率であって、これが市場における交換比率と密接に関連しているということをのちにみいだしたとしても驚くにはあたらないであろう」²¹⁾ と言っている。これは、「ロビンソンと彼の自製の富を構成している諸物とのあいだのすべての関係」のうちに「価値のすべての本質的規定がふくまれている」というマルクスの見解になんとよく似ていることか。このことは、いろいろなものの価値比率が、それらの生産に必要な労働時間の比率によって規定されるという見解が、交換関係を捨象し、したがって実は価値比率自体をも捨象して、同じ個人の諸労働時間の比率を価値比率と誤認していることを、よくあらわしているものといえよう。

なお、労働価値説にたいして、ボールディングよりは慎重な態度をとっているようにみえるサムエルソンも、スミスが想定した「ストックの蓄積にも土地の私有化にも先だつ初期未開の社会状態」においては、いろいろ

19) Ibid., p. 54. 同上訳書, 上, 61頁。

20) Ibid., p. 29. 同上訳書, 上, 32頁。

21) Ibid., pp. 29-30. 同上訳書, 上, 33頁。

なものの価値比率は、それらの生産に必要な労働時間の比率によって決定されると考えている。彼は言う。

「この点を理解するためには、スミスの有名な鹿とビーバーの例を検討してみるとよい。いまかりに2時間の狩猟で1頭の鹿が得られ、4時間で1匹のビーバーが得られるとしよう。すると、鹿とビーバーとのあいだの価格比率は、比較労働時間だけで決まり、ビーバー1匹の価格は鹿2頭と等しくなる。……このような労働費用だけによる価格の決定は、財の数がどれだけあっても同じように妥当するのであって、それは、原始的な市場であればどこでも、ある財の価格が調和を乱してかりにも有利な利潤をもたらすようなことがあると、猟師を他の財からその財へ移動させるという形で貫きとおされるのである。」²²⁾

ここでのサムエルソンの見解は、ボールディングとまったく同じであるから、その難点もすでに明らかであろう。二人の違いは、労働価値説自体を認めるか否かという点にあるのではなく、労働価値説が妥当しうる条件は何かという点にある。サムエルソンによれば、「土地があり余るほどあるかぎり、単純な労働価値説が支配する」²³⁾ のであり、労働価値説の弱点は、土地の稀少性を考慮に入れていない点にある。しかし、土地が「稀少」ではない時代がはたしてありえたのか、土地の稀少性が他の商品の稀少性とどう違うのか、そして、土地は労働生産物ではないという見解は正しいのかという問題——これらについては、マルクスも近代経学者も同じ答えを出す——については、別の機会に検討せざるをえないとしても、労働価値説が、土地の稀少性の問題とはかかわりのない点に弱点をもっていることは、すでに明らかであろう。サムエルソンが、「貿易の有利性は国の境

22) Paul A. Samuelson, *Economics*, 8th Edition, Kōgakusha, p. 713. 都留重人訳『経済学』下、岩波書店、1205—6 頁。訳文は必ずしもこの訳書に従っていない。力点は引用者による。

23) Ibid., p. 727. 同上訳書、下、1229—30頁。

界線と特別の関係をもつわけではない。上で展開した諸原理は、国の集団どうしのあいだ、さらには同一国内の地域間にも妥当する」²⁴⁾ と言っていることは、リカードゥの見地からの前進だと言えるが、もう一つの関門を越えて、それを個人間の関係にも適用しなければならないのである。

【4】 「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」

各人を商品供給者にする動機についてのこれまでの考察は、同じ種類の商品を提供する人々のあいだの関係を捨象していた。しかし、マルクスは、はじめから、同じ種類の商品の生産に異なる労働時間を必要とする人びとがいることを想定し、各商品の価値を規定するものは、その生産に「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」だと言っている。

「一商品の価値が、その生産中に支出された労働量によって規定されるならば、ある人がより怠惰またはより無器用なほど、彼はその商品の製作にそれだけより多くの時間を必要とするので、彼の商品はそれだけより高い価値があるようにみえるかもしれない。しかし、価値の実体をなす労働は同じ人間的労働、同じ人間的労働力の支出である。商品世界の諸価値に表わされる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成りたっているのであるが、ここでは一つの同じ人間的労働力とみなされる。これら個別的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として活動し、したがって、一商品の生産においても、平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間だけを要するかぎり、他の労働力と同じ人間的労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するために必要とされる労働時間である。」（『資本論』 Bd. I, S. 43. 岩_{c1} 80—81 頁）

24) Ibid., p. 664. 同上訳書，下，1127頁。

しかし、各生産者にとっては、彼が供給するものと同じ種類の商品を供給する生産者が他にいるかどうかということは、彼の供給する商品の当面の価値への影響という点では大きな意味をもつが、このことは、彼をその商品の供給者にした動機自体とは無関係である。すでに明らかなように、この動機は、各人が供給するものを生産するために必要な自分の労働時間が、彼の受けとるものを彼自身が生産したばあいに必要なはずの自分の労働時間よりも小さいということにもとづいて、同じ必要物を獲得するために要する自分の労働時間が短縮されるということにはかならず、したがって、自分の労働時間と交換相手の労働時間との関係には何のかかわりもないのである。だから、たとえば、ある人が「一商品の生産において……平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間だけを要する」ものとし、他の人が他の種類の商品の生産において「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」だけを要するものとしても、彼らの商品の価値比率がこれらの商品の生産に必要な彼らの労働時間の比率によって規定されるような根拠は存在しないであろう。これらの平均的生産者どうしの交換を想定してみても、この交換が成り立つ条件は、彼らの何れもが、その必要物を獲得するために必要な自分の労働時間を交換によって短縮しうること以外にはありえない。

このように、各人は、彼が必要とする物を獲得するために必要な自分の労働時間を短縮するために、その必要物ではなく商品を生産するのであって、この動機は、彼の供給する商品の生産に必要な自分の労働時間が、同じ種類の商品の生産に必要な他人の労働時間よりも短いか長いかという比較とも無関係である。各人は、他人よりも短い労働時間で生産しうりょうな商品種類を選択するのではなく、同じ時間の自分の労働で最も大きな価値を獲得できるような商品種類を選択するであろう。だから、どの人も、

ひとたびある種類の商品を生産しはじめれば、できるだけ短い労働時間でそれを生産しようと努めはするが、同じ種類の商品を生産する人びとの間でのスピード競争に敗れても、彼がその生産部門から退くことにはならない。ある種類の商品の価格が何かの原因によって低下したときにその生産部門から脱けだす者がいるとしたら、それは、この人がスピード競争に敗れたためではなく、彼がその生産によっては自分の同じ労働時間で最も大きな価値を獲得できなくなったためであろう。だから、その商品の生産に「平均的に必要な労働時間」またはそれよりも短い労働時間を要する者が、まっ先にその生産部門から脱けだすばあいさえありえよう。

各個人としては、あるものの生産に必要な自分の労働時間が、同じ種類のものの生産に必要な他人の労働時間よりも、また、その生産に「平均的に必要な労働時間」よりも長かろうが短かかろうがどうしようもないであろう。しかも、人は、スピード競争に勝つ満足よりも、労働条件の快適さの方を選ぶこともあろう。しかし、人は、彼の選択した労働条件のもとでの自分の労働時間を増やすことなしに、彼の獲得する必要物を交換によって増やすことができるのである。くり返して言うが、たがいに独立な人びとを交換関係に入れさせる動機は、各人のこの利益以外にはないであろう。

【5】 「単純な平均労働」と「複雑労働」

あるものの生産に「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」がその価値量を規定するというマルクスの見解は、間もなく彼自身によって事実上修正されている。彼は言う。

「……商品の価値は、単なる人間的労働を、人間的労働一般の支出を表わしている。……それは、平均してすべての普通の人間が、特別の発達なしに、彼の肉体的組織の中にもっている単純な労働力の支出である。単純な平均労働自体は、異なる諸国および文化諸段階ではその性格を変えるのではあるが、しかし、現存する一つの

社会では与えられている。ヨリ複雑な労働は、累乗された、またはむしろ掛けられた単純労働としてのみ通用し、そのため、複雑労働のヨリ小さな量が単純労働のヨリ大きな量に等しいことになる。この還元がたえず行われているということは、経験が示している。ある商品は最も複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値はこの商品を単純労働の生産物に等置し、したがって、それ自身、単純労働の一定量を表わしているにすぎないのである。種々の労働種類が、その度量単位としての単純労働に還元される種々の割合は、諸生産者の背後における一つの社会的過程によって確定され、したがって彼らには慣習によって与えられているようにみえる。」（『資本論』Bd. I, S. 49. 岩₍₁₎90—91頁）

このように、「複雑労働のヨリ小さな量が単純労働のヨリ大きな量に等し」く、「ある商品は最も複雑な労働の生産物であるかもしれない」としたら、ある商品種類の「社会的に正常な生産条件」のもとでの一定時間の労働は、他の商品種類の「社会的に正常な生産条件」のもとでの同じ時間の労働と同じ量の労働として通用するとはかぎらないことになる。

こうして、マルクスが、あるものの生産に必要な「労働時間」がその価値量を規定すると言ふばあい、この「労働時間」は、各個人の現実の労働時間ではなく、また、「平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間」でもなく、「単純な平均労働」すなわち「平均してすべての普通の個人が……もっている単純な労働力の支出」の継続時間だと考えられているのである。「労働時間による価値量の規定」（同上、S. 81. ₍₁₎ 147頁）を主張するために、マルクスは、現実の異なる労働時間を平均するだけではなく、たがいに独立な異なる個人の労働能力自体をも平均し、「平均労働力」（前節冒頭の引用文）「単純な労働力」を前提する。「平均労働力」を想定したことは、事実上、たがいに独立な異なる個人を平均して「平均個人」を想定したことにほかならない。彼は『経済学批判』で次のように言っている。

「一般的人間的労働というこの抽象は、ある与えられた社会のすべての平均個人がなしうる平均労働，すなわち，人間の筋肉，神経，脳髓などのある一定の生産的支出のうちに存在している。それは，すべての平均個人が教え込まれるような，そしてなんらかの形態で行わざるをえない単純労働である。」²⁵⁾

マルクスが，「価値のすべての本質的規定」を明らかにするために思い浮べた孤立人口ビンソンは，この「平均個人」の具象化されたものだったのであろう。しかし，「これら個別的労働力のおのおのが，社会的平均労働力という性格をもち，このような社会的平均労働力として活動」するとしたら，また，「すべての平均個人がなしうる平均労働」というものが存在するとしたら，これらの平均個人の間での交換による利益は誰にも存在せず，この「平均労働」はたんなる私的労働でしかありえないであろう。

それは別としても，「単純な労働力」および「単純労働」という基準が，どこにどういう形で「与えられている」のか？また，ある種類の商品の生産に必要な労働時間が，「単純労働」の一定時間として通用するということが何によって規定されるのか？マルクスは，このことが「生産者の背後における一つの社会的過程によって確定される」と言うだけである。どのような「社会的過程」なのか？彼は，肝心のことを述べていない。もし，それは，種々の商品生産者たちが「種々の労働種類」の生産物を交換しあい，それらの価値を確定する過程であるとしたら，各種類の労働の生産物の価値量こそがこの労働の大きさの尺度であるということになるろう。

実際には，種々の労働種類の複雑さの程度を測る尺度は，人によって異なるであろう。ある人にとって「単純労働」であるものが，他の人にとっては「複雑労働」でありえよう。さらに，ある商品種類の生産に必要な労働は誰にとっても単純な労働であると仮定しても，人々がこの商品の生産

25) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag Berlin, 1951, S. 23. 邦訳『経済学批判』国民文庫，19—20頁。訳文責は引用者にある。

に必要とする労働時間は同じではない。マルクスの「単純労働」という概念はこのことを無視し、「これら個別的労働力のおのおのは、社会的平均労働力という性格をもち……したがって、一商品の生産においても、平均的に必要なまたは社会的に必要な労働時間だけを要する」ことを想定することにもとづいてのみ成りたちえたのである。

しかも、もう一步ゆずって、この非現実的な想定を認めたとしても、労働の複雑さの程度を測る共通の尺度が、労働の生産物の価値から独立に存在することにはならず、したがって、労働の複雑さの違いが、同じ労働時間で生産される価値の大きさの違いを規定することにはならないであろう。仮に、労働の複雑さの違いが、同じ労働時間で生産される価値量の違いに対応するとしたら、この価値量の違いこそが、労働の複雑さの違いの尺度であろう。したがってまた、これらの価値量こそが、労働自体の大きさの尺度でもあるということになる。

マルクス自身も、「ある商品は最も複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値は、この商品を単純労働の生産物に等置し、したがって、それ自身、単純労働の一定量を表わしているにすぎないのである」と言っている。ここでは、彼が「単純労働」という基準を明らかなものとして前提していることを問題外として言えば、彼は、「最も複雑な労働の生産物」の「価値」が、この「最も複雑な労働の生産物」を「単純労働の生産物」に等置し、したがって、「最も複雑な労働」を「単純労働の一定量」に等置すると言っている。したがって、マルクスは、「労働時間」によって測られた労働の大きさが価値量を規定するという見解の根拠として、この労働の大きさ自体が価値量によって規定されるという命題を事実上述べていることになる²⁶⁾。すなわち、マルクスは、「労働時間」が価値量を規定す

26) ベーム・バヴェルクも、「このことは、あからさまな純然たる循環論法を意味する」(Eugen von Böhm-Bawerk, *Kapital und Kapitalzins*, I, 4 Aufl., Iena 1921. 竹原八郎訳『マルクス学説体系の終焉』日本評論社, 137頁)と批判している。

るという見解の根拠として、事実上、それとは反対の見解を述べているのである。実際には、「労働時間」が価値量を規定することも、価値量が「労働時間」を規定することもありえない。「労働時間」という物理学的な大きさと、価値という経済学的な大きさとが、たがいに一義的な関係にあると考えることが誤っているのである。価値量によって測られるものは、労働の経済的な大きさにほかならない。

なお、マルクスは、賃金労働者の労働についても、事実上、労働賃金を、その労働の大きさの尺度とみなしている。彼は言う。

「社会的平均労働に対して、ヨリ高度な、ヨリ複雑な労働として通用する労働は、ヨリ高い養成費がかかる、したがって単純な労働力よりもヨリ高い価値をもつ労働力の発現である。この力の価値がヨリ高いならば、それは、したがってまたヨリ高度な労働に発現し、したがって、同じ時間内に、比例的にヨリ高い価値に対象化される。」（同上、S. 206. (2) 99—100頁）

ここでは、マルクスは、労働者に支払われる賃金が「ヨリ高いならば」彼の労働は「ヨリ高度な労働」であり、「したがって同じ時間内に比例的にヨリ高い価値に対象化される」と言っており、このことによって、その賃金がヨリ高い労働も、「社会的平均労働」と同様に「剰余価値」を生み出すという見解を証明しようとしているのである。この剰余価値説の妥当性を別として言っても、彼が、労働賃金を、労働の複雑度の尺度および労働によって生産される価値の尺度としてとりあつかっていることは明らかであろう²⁷⁾。したがって彼は、事実上、労働賃金を、その労働の大きさの尺度としてとりあつかっているのである。

27) ヒルファディングは、このように解釈したベルンシュタインに反対して、「労働賃金から労働生産物の価値を推論することは、マルクスの理論と最もはなはだしく矛盾する」（Rudolf Hilferding, *Böhm-Bawerks Marx-Kritik*, „Marx-Studien“ Bd. I, Wien 1904. 玉野井芳郎・石垣博美訳『マルクス経済学研究』法政大学出版局, 158頁）と言っている。それはそのとおりであろう。だから、彼は、マルクスを批判すればよかったのである。ところが、彼は、マルクスが矛盾をおかすはずはないという信念にもとづいて、ベルンシュタインの解釈を批判したのであった。